

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：13501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：25780510

研究課題名(和文) 東南アジア域内の多国間学生移動と留学生のキャリア形成 ASEAN共同体に向けて

研究課題名(英文) Intra-Regional Student Mobility and Career Development of International Students in Southeast Asia: towards ASEAN Regional Network

研究代表者

鴨川 明子 (KAMOGAWA, Akiko)

山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：40386545

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東南アジア域内を移動する留学生のキャリア形成について、ジェンダーの観点から明らかにすることを目的とした。

主にマレーシアとブルネイにおいて実地調査を行った結果、東南アジアには、初等・前期中等教育が完全普及しつつある国も多いが、植民地期から続くエリート養成型の留学には男女間格差が残された国もある。女性の高学歴化が進む中で、東南アジア域内を移動する留学生のキャリア形成という新しい視座を提供することによって、男女間格差を構造的に理解する一助となった。この意義は、1990年「万人のための教育(EFA)世界会議」以降、国際機関や援助国が取り組んできた課題に一石を投じるものであると思われる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東南アジア10カ国はASEAN共同体の構築を目指している。東南アジア域内を移動する留学生は、ASEAN共同体を構築する上での原動力になると思われる。

研究期間全体を通じて対象国において実施してきた研究成果の学術的意義や社会的意義は、A)東南アジアの留学生を対象に、「域内の多国間学生移動」という観点から、地域連携や地域統合の問題をとらえる点にあり、B)東南アジアの女子留学生にとって「域内留学」という新たな可能性を模索する実証研究であるという点にあった。さらに、C)女性の高学歴化が進む中で留学生のキャリア形成という新しい視座を提供することによって、男女間格差を構造的に理解する点にある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the career development of international students moving in Southeast Asia from a gender perspective.

As a result of conducting field surveys mainly in Malaysia and Brunei, in many Southeast Asian countries, primary and lower secondary education is becoming more widespread, but there are gaps between men and women in studying abroad for elite moldings that began in the colonial period. In some countries as women have become more highly educated, they provided a new perspective of career development for international students migrating within Southeast Asia, helping to structurally understand the gender gap. This significance is a focus on the challenges that have been addressed by international organizations and donors since the 1990 World Conference on Education for All (EFA).

研究分野：比較教育学

キーワード：比較教育学 ジェンダー 女子教育 マレーシア ブルネイ キャリア形成 留学生 女性の高学歴化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ASEAN サミット(2009年)を受けて、東南アジア10カ国は2015年までにASEAN 共同体の構築を目指していた。アジア地域統合やASEAN 共同体の構築が議論される中、アジア域内を移動する留学生は、地域共同体を構築する上での原動力になると考えられる。しかしながら、留学生移動という研究課題は、政策動向などマクロ的側面からとらえられることが多い反面、留学生自身のキャリア形成というミクロ的な側面から分析されることは少なかった。また、アジアから欧米への移動に比して、アジア域内の移動に注目する研究は少なかった。

視点を転じて、東南アジアには、初等・前期中等教育が完全普及しつつある国も多いが、植民地期から続くエリート養成型の留学には男女間格差が残された国もある。人の移動が進む現代、男女間格差を構造的に理解するためには、国内の「静的」な格差の構造だけでなく、国際的かつ「動的」な格差の構造に目を向けなければならない。こうした研究開始当初の問題意識は、1990年「万人のための教育(EFA)世界会議」以降、国際機関や援助国が取り組んできた課題に一石を投じるものと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、東南アジア域内を移動する留学生のキャリア形成について、ジェンダーの観点から明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

上記の問題意識の下に、本研究は、2015年ASEAN 共同体の構築の目標年に向けて、3年間に渡って実施することを当初予定し、マレーシアとブルネイを主たる対象国に選定し研究を進めてきた。

まず、初年度には、代表的な地域機関が実施する多国間学生移動プログラムの現状と背景を文献調査により整理した。続く第2,3年度には、東南アジアにおける女性の高学歴化と域内の学生移動という視点から、対象国において、教育省、大学等を訪問し関係者にインタビューを実施してきた。特に、ブルネイでは、ブルネイダルサラーム大学の教員他、教育省の担当官と意見交換する機会を得ることは大変大きな収穫であった。最終年度には、実地調査の結果を踏まえて、東南アジアにおける女性の高学歴化と女子学生のキャリア形成のダイナミズムを描くことを試みた。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

研究の主な成果は以下の通りである。

東南アジアの地域機関や大学による先駆的な多国間学生移動を促進するプログラムの整理
主に、初年度には、代表的な地域機関が実施する多国間学生移動プログラムの現状と背景について文献調査により整理した。また、各国のリーディング大学におけるプログラムを調査し類型化を図った。

具体的には、タイを拠点とする地域機関(SEAMEO、AUN)、各国の教育省や高等教育省、人材省、統計局等のホームページを通じて最新の資料を収集し、プログラムの特徴と課題を抽出した。

さらに、産休と育休によって研究の開始時期を延長してきたことから、ASEAN 統合やASEAN 共同体に向けた政策の最新動向とそれらの教育へのインパクトについて調査するとともに、研究のブランクをうめるべく、カウンターパートに適宜連絡し実地調査の可能性を検討した。



東南アジアにおける女性の高学歴化と域内の学生移動の視点

東南アジア域内の学生移動における女性のキャリア形成の実態把握に努めた結果、最終年度に、世界教育学会(WERA)において、「マレーシアにおける留学生移動に対するアジア域内ネットワークのインパクト」というタイトルで英語論文を発表し、アメリカやシンガポールの参加者からフィードバックを得たことは大きな収穫であった。

また、他の科研と有機的に連動しながら研究を進めてきた。ミレニアム開発目標(MDGs)から持続可能な開発目標(SDGs)へとシフトする中で、ジェンダーに関する新たな課題を整理するとともに、東南アジアにおけるジェンダーと教育に関わる政策および統計的動向について文献調査した。その結果を「マレーシアにおける女子・女性の教育 男女間格差の解消とジェンダー平等という2つの課題をめぐって」というタイトルで分担執筆し公刊した。

上記の論考をもとに、実地調査の結果の一部について、東南アジアにおける「女性の高学歴化」と題する『東南アジア文化事典』(丸善出版)の項目執筆に生かした。「女性の高学歴化」に関する項目において、「近年、東南アジア域内・域外を問わず高等教育のネットワーク化が進み、タ

いやマレーシア、シンガポール各国政府は地域のハブとなるべく尽力している。東南アジアの女性の高学歴化はもはや一国内の事象ではなく、広く東南アジア域内や域外への留学という女性の選択肢の広がりという観点からとらえる必要がある。また、東南アジアに留学してくるアジアの他地域の女性やアフリカの女性に、東南アジアのジェンダーと教育の現在や未来がどのような影響を及ぼすか、女性の高学歴化の未来への新たな課題も残る。」と指摘し、東南アジア域内を移動する留学生のキャリア形成という視点の重要性を指摘した。この「女性の高学歴化」に関する項目は研究成果の一部を平易に書き記し、広く一般に公表するためのものである。

最終年度には、目まぐるしく変わるマレーシアの「女性の教育」の現状と課題について、国際的なジェンダーと教育の潮流を踏まえた上で、イスラームとジェンダーという観点から日本語論文を執筆している。

東南アジアには、初等・前期中等教育が完全普及しつつある国も多いが、植民地期から続くエリート養成型の留学には男女間格差が残された国もある。人の移動が進む現代、男女間格差を構造的に理解するためには、国内の「静的」な格差の構造だけでなく、国際的かつ「動的」な格差の構造に目を向けなければならない。この点を実証的に明らかにすることに、本研究の意義が認められる。この意義は、1990年「万人のための教育（EFA）世界会議」以降、国際機関や援助国が取り組んできた課題に一石を投じるものであると言えそうである。

アセアンネスを意識した市民性教育

2015年までにASEAN共同体の構築を目指す上で、アジア地域統合やASEAN共同体の構築を教育分野で検討する必要がある。第2年度以降、アセアンネスを意識した市民性教育に関する論考を、ブルネイの研究協力者2名とともにまとめてきた。まず、主たる研究対象国の一つであるブルネイに関して、アセアンネスを意識した市民性教育に関する論文「ブルネイの市民性教育：アセアン共同体の市民性教育（共著、東信堂）」を著した。その論考をもとに、東南アジア各国を研究対象とする専門家とともに、日本比較教育学会のラウンドテーブルにおいて共同発表する機会を得た。これら一連の共同研究により、他のASEAN諸国の市民性教育に関する意識と実態に関して国際比較研究を試みる素地を築くことができた。この成果は、ASEAN共同体の構築に資する学生移動と留学生のキャリア形成のための政策的示唆を提供するものであり、海外研究者からの関心も非常に高く、英語書籍出版企画が通過した。研究代表者は英語による共著論文を脱稿している（R2～R3年度出版予定）。

マレーシアの教員制度と「女性職」としての教員

他の教員研修に関わる科研と連携しながら、マレーシアの教育政策の動向および「女子・女性の教育」の最新動向を統計的に分析してきた。2010年代には、マレーシア国内で教員に関わる教員制度改革が行われてきた。ドラスティックに変化するマレーシア国内の教員制度や教員研修の動向について他国と比較しながら、日本比較教育学会で複数回共同発表してきた。それらの発表内容と発表へのフィードバックをもとに英語論文にまとめ公表した。当該論文において、マレーシアやブルネイでは「女性職」として位置付けられる教員という職業の現状と問題点を指摘した。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

以下に、得られた成果の国内外における位置付けとインパクトおよび研究の社会的意義を記す。

域内の多国間学生移動と地域連携

東南アジアの女性を対象に、「域内の多国間学生移動」という観点から、地域連携や地域統合の問題をとらえようとした。単に、各国地域内の留学生政策や2国間の学生交流に留まらず、地域連携や地域統合を模索するべく、東南アジア域内の多国間の学生移動に焦点を当ててきた。現在日本の大学が中心となり日中韓等と実施しているキャンパス・アジアプログラムなどへの示唆を提供することとなった。

東南アジアにおける女性の高学歴化に対するジェンダー視点の重要性

東南アジアの女性にとって「域内留学」という新たな可能性を模索する実証研究であり、ジェンダーの観点から、日本の留学生のニーズ把握にも示唆を提供するよう努めた。日本における東南アジアからの留学生は、中国（台湾）や韓国に次いで上位を占める。今後増加が予測される東南アジアからの留学生のニーズを把握することには意義が認められる。また、女性のキャリア形成を主題とする本研究は、女性研究者支援が積極的に推進される日本にあって今日的意義が認められる。また、日本人男性の「内向き志向」を解明する手がかりを提供すると考える。

進路選択、キャリア形成という視点からの社会への研究成果の還元

最後に、社会への研究成果の還元という観点からのインパクトであるが、山梨県の県立高校において、「日本の教育、アジアの教育 教育を比較する」と題する出前講義を行った。その折に、

研究成果の一端を高校3年生に紹介し、国際的な視野を持つ進路選択する上での一助となるよう心がけた。

また、補足的にはあるが、日本教育学会および日本比較教育学会において、キャリア形成に関わるワークショップの招聘講師やラウンドテーブルの企画と発表という形で、社会に還元する機会を得た。

(3) 課題と今後の展望

研究期間の途中で、育児休業等に伴う交付申請留保を複数回行い、研究を中断することとなった。しかしながら、研究申請時よりも長きにわたり研究に従事した結果、他の科研とも有機的に連動し幅広い視点から問題に迫ることとなり、研究成果も多岐に渡ることができた。

研究代表者は、令和元年度より新規に科研費助成(基盤C)「東南アジア島嶼部における男子・男性のワークライフキャリア形成」を受けている。本研究(若手B)を基盤として、男性学に抛りながら、新規研究(基盤C)に発展的に継続していきたい。新規研究は留学生を主たる対象にしていないが、留学生移動の文脈で日本人男性の「内向き志向」が問題視されている今日、ジェンダーとキャリア形成の問題を多様に解明する手がかりを提供すると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鴨川明子・金子奈央	4. 巻 60
2. 論文標題 「国境地域に行き届く国民教育制度：マレーシア（サバ州） インドネシア（北カリマンタン州）」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『比較教育学研究』	6. 最初と最後の頁 148-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鴨川明子・日暮トモ子・鈴木賀映子	4. 巻 第27号
2. 論文標題 アジアにおける教員研修制度の特質 マレーシア，中国，日本を事例として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山梨大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 195-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鴨川明子	4. 巻 N.0
2. 論文標題 マレーシアの教員制度と教員研修	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『平成28～30年度科学研究費補助金の挑戦的萌芽研究（16K13537）「21世紀型スキルに対応した教員研修の在り方に関する国際比較研究」（代表 長島啓記）中間報告書』	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 1件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 鴨川明子
2. 発表標題 マレーシアの学校に行けない子どもたち（OOSCY）：序論
3. 学会等名 第3回東南アジア教育研究フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shigekazu Yoshida, Tomoko Higurashi, Akiko Kamogawa and Hironori Nagashima
2. 発表標題 A Comparative Analysis of Teacher Professional Development:with a focus on TALIS 2013
3. 学会等名 World Education Research Association(WERA) 2019 Focal Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akiko Kamogawa
2. 発表標題 The Impact of the Asian Regional Network on Student Mobility in Malaysia from a Gender Perspective
3. 学会等名 World Education Research Association(WERA) 2019 Focal Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鴨川明子・金子奈央
2. 発表標題 マレーシア サラワク州・サバ州の国境地域における教育 ブルネイとインドネシアとの国境
3. 学会等名 第55回日本比較教育学会自由研究発表
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日暮トモ子・鴨川明子他
2. 発表標題 諸外国における21世紀型スキルに対応した教員研修の展開
3. 学会等名 第55回日本比較教育学会自由研究発表
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鴨川明子, 鈴木賀映子, 吉田重和, 佐藤裕紀, 長島啓記, 日暮トモ子, 古阪肇, 村井典子
2. 発表標題 「教員研修の比較分析 TALIS2013の結果から」
3. 学会等名 第54回日本比較教育学会（於：広島大学）自由研究発表
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鴨川明子（企画および中島悠介・高橋 望・森下 稔との共同発表）
2. 発表標題 「教職大学院で働きながら，比較教育学者の「ワークライフキャリア」を考える」【研究委員会企画】「比較教育学を学ぶ人のためのアカデミック・キャリアシリーズ 教員養成・研修に携わる」
3. 学会等名 日本比較教育学会第54回（於：広島大学）ラウンドテーブル
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鴨川明子
2. 発表標題 「研究者の初期キャリアをどう形成するか 比較教育学の場合」
3. 学会等名 日本教育学会 若手研究者支援ワークショップ講師として報告・参加（招待あり）（於：学習院大学）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鴨川明子・日暮トモ子・鈴木賀映子（2017）
2. 発表標題 「マレーシア，中国，日本における教員研修の特質」
3. 学会等名 第53回日本比較教育学会（於：東京大学）自由研究発表
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鴨川明子（平田利文・森下稔・羽谷沙織・乾美紀・手嶋将博・長濱博文・池田充裕・鈴木康郎・石村雅雄）
2. 発表標題 「第2章 ブルネイの市民性教育：アセアンネスを意識した市民性教育に向けて」
3. 学会等名 日本比較教育学会第53会（於：東京大学）ラウンドテーブル「アセアン共同体における市民性教育の現状と課題」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鴨川明子
2. 発表標題 マレーシアの学校改善と教員制度改革
3. 学会等名 第52回日本比較教育学会自由研究発表
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 信田 敏宏編集委員長、綾部真雄/岩井美佐紀/加藤剛/土佐桂子編（鴨川明子項目執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 506-507
3. 書名 『東南アジア文化事典』（「女性の高学歴化」に関する項目執筆）	

1. 著者名 鴨川明子（分担執筆）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 学術研究出版/ブックウェイ	5. 総ページ数 284
3. 書名 「マレーシアにおける女子・女性の教育 男女間格差の解消とジェンダー平等という2つの課題をめぐって」村田翼夫編『東南アジアの教育モデル構築 南南教育協力への適用』	

1. 著者名 鴨川明子, サリマM.サラール, ロスマウィジャ ジャワウィ (分担執筆、共著)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 352
3. 書名 「第2章 ブルネイの市民性教育：アセアンネスを意識した市民性教育に向けて」平田利文編 『アセアン共同体の市民性教育』東信堂	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----